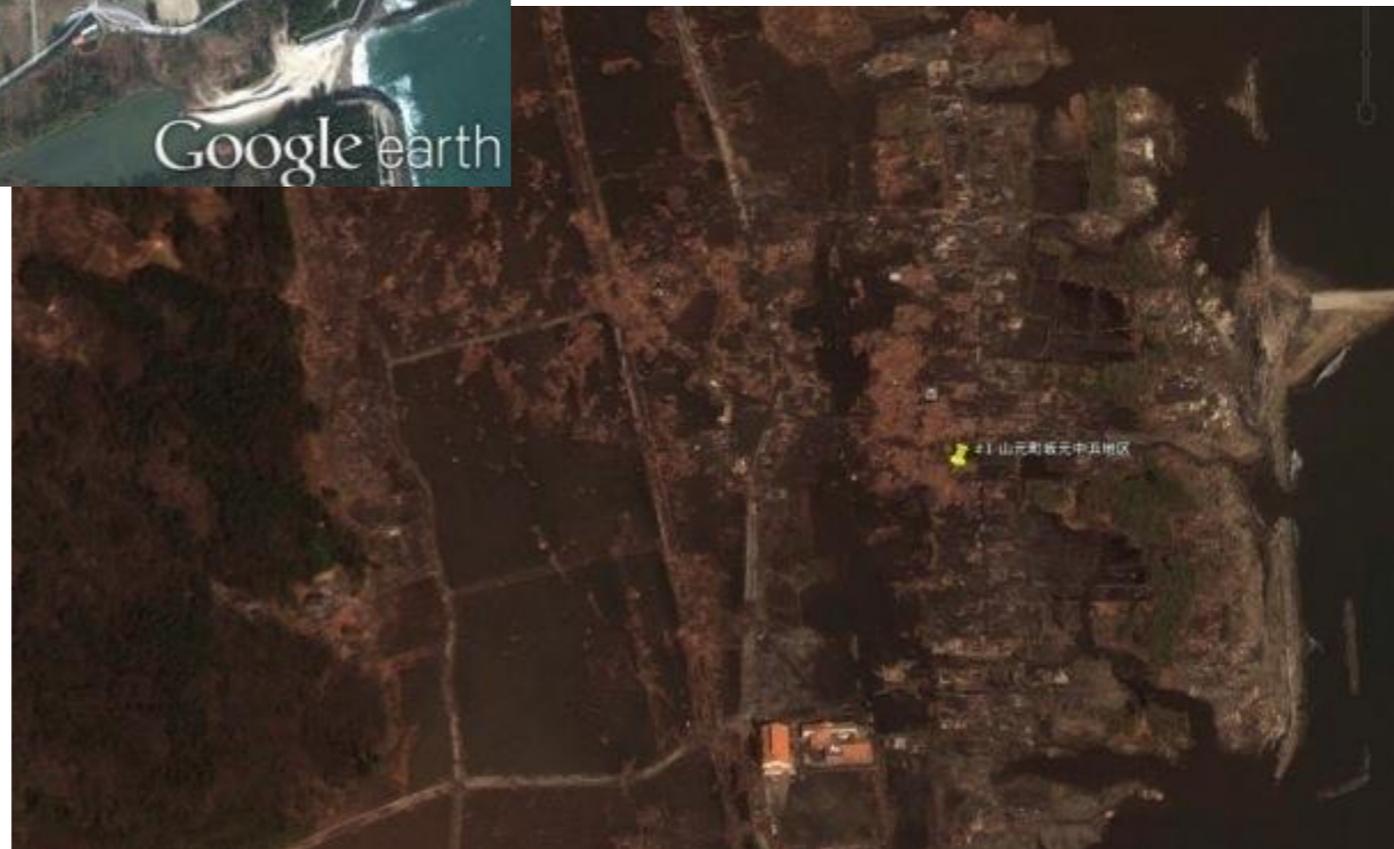


# The role of intangible cultural heritage in the recovery process of natural disaster: a case of Japan



Hiroki Takakura  
(Tohoku  
University)

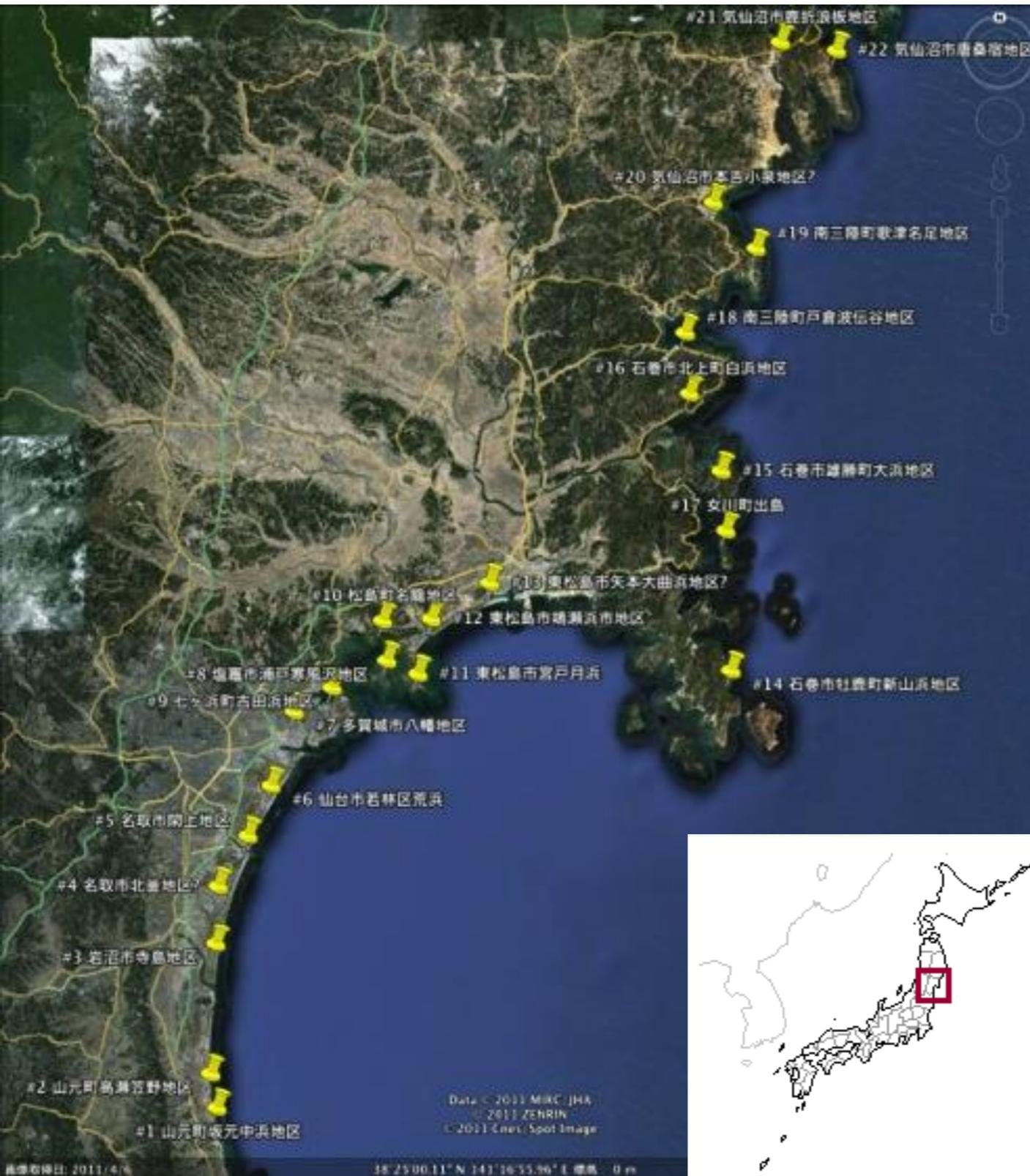


to collect the local memories on the intangible cultural heritage: before the Tsunami, just after what happened, and the later continuing process.

- the practical support from the local administration
- information about the societies for preserving *kagura* and other folk performing arts
- to know what kind of people conduct the surveys



# Methods



- The survey target is the 23 local communities
- the list of the intangible cultural heritage
- Thirty researchers and students participated the project
- The semi-structured interview

# Results

- Total of 152 days survey
- Interviews with approximately 120 persons (257 persons in cumulative total)
- 1,000 pages and 250 photographs
- Two reports and one book, database

報告集  
見本

Index and community name

Reporter, Researcher, Assistant

Date of Survey

Informant information

Sub-headings

A-1 山元町坂本

2011年12月12日(月)

報告者名	高倉 浩樹	被調査者生年	1945年(男)
調査者名	高倉 浩輝	被調査者属性	中浜神楽保存会
補助調査者	赤尾 智宏		

話者について

昭和20年7月28日に、山元町中浜で生まれた。66歳。家は農家であったが、不動産をやっていたので、仙台で2年間建設会社に勤め、デベロッパーの仕事をした。その後独立して、不動産会社をやった。遠刈田に仕事場。自宅は山元町中浜だったの車で通勤した。遠刈田で不動産事業をしていたのは別荘地ブームで仕事があったため。その後、会社を仙台に移した。話者が、その後中浜神楽を担う親友会に入っただけで、学校に通っていたときである。祭や神輿担ぎが途切れたことから、話者と話者の友人達は神輿を担ぎたいという思いがあった。神輿だけでなく、青年会がなくなったため、青年が集まる機会もほしかった。中浜に残った青年達を中心になって親友会が結成された。

現在、仮設住宅に母と二人で暮らしている。中山の仮設住宅地区には、神楽にたずさわっている人はいない。

被災後の中浜神楽の現状について

中浜神楽とは、中浜の浜の方つまり坂元の南の地区で行われる神楽。この地域はすべてが流出した。その結果、集会所に保管していた神楽の道具類も流出してしまった。現時点で、道具類は見つかっていない。

話者の保存会のメンバーはばらばらになってしまった。残っている人はいない。地元から離れている人がどこにいったのか不明である。神楽をやるためには道具をそろえて、メンバーをそろえることから始まる。現在はやれるかどうかの見通しが立っていない。

中浜地区には300戸ほどの家があり、神楽が行われる天神社の祭典が最も大きい。保存会の30代の後継者には亡くなった人がいる。また、中浜地区から移動した人もいて、現状について話者は把握していない。天神社は津波の被害もなく残っているが屋敷が傷んでいる。

中浜神楽保存会について

保存会は30年前ぐらいに関わり始めた。その頃はいろいろな地区で神楽が復興し始めた時期だった。

およそ35~40年前に青年の集いや青年文化会で郷土芸能を舞うようになり、他の地区から代表が集まり青年大会が催されていた。その時期に神楽が復興されるようになり、各地区の芸能が復活し始めた。中浜神楽が復活したのは同時期で、話者の青年時代である。中浜地区以外でも



写真1 正面から見た八重垣神社跡



写真2 正面右に築められた神社残骸



写真3 鳥居や石碕



写真4 小祠

神社で開かれていた「天王さん祭」を無形文化財に指定できないか検討中である。「単に建物がある、ないというだけでなく、地域性を考慮して文化財としたい」と考えている。

「天王さん祭」を無形文化財として指定したいが、指定文化財は半永久的に継続させる必要がある。その場合、神輿を担ぐ人など、継承する人がいなければならない。話者の友人に、笠野でサーフショップを営んでいる人物がいる。今年の夏に町長杯のサーフィン大会を計画していたが、東日本大震災により予算審議が中断され、企画は流れてしまった。サーフィン大会は、現在行われているホッキ祭りや並んで町の大きなイベントにするつもりだった。山元町のビーチには山形など県外からもサーファーが訪れていた。ビーチのクリーン活動に従事するようなサーファーであるため、上手く祭の担い手へと取り込めないかと期待している。現状では、文化財指定に向けて、「人がいない、住宅がない、地域がない」という問題がある。話者は、他にも大晦日に八重垣神社に参拝できるように、発電機で電気を通す計画を考案中である。一時的に電気が通った場合、地域の人々が参拝するのではないかと考えている。

震災後の文化財関係の活動として、やまもと民話の会という団体による活動がある。やまもと民話の会とは生涯学習の会であり、教育委員会の管轄対象である。この団体が津波の聞き取りを行っている。やまもと民話の会による『巨大津波』では八重垣神社の宮司A氏、中浜地区の神楽について言及してある。地域の古老が津波で亡くなったため、言い伝えをどのように継承するか

12

17

[🏠 トップページ](#)

[🔍 調べる](#)

[📖 調査ノート](#)

[📌 みやしんぶんとは](#)

[🔗 関連リンク](#)

トップページ >

▶ フリーワードで調べる

[🔍 検索する](#)

▶ キーワードから調べる

地域概要    話者/家

社会組  
衣食住  
年中行  
民俗芸  
信仰



震災前    震災後

▶ 調査地から調べる



写真1 萩原神社の落成式に奉納される鹿踊 (2012年11月)



キジラシマ (鎮守嶋) 観音

K家の東側には、現在国道45号線から鎮守橋に抜ける道が通っているが、以前はK家の敷地であり、鎮守嶋観音（話者はキジラシマ観音と発音、チンジュガシマのことだと市史に記載された文字を示す）と池があった。K家の以前の小字が「鎮守」。鎮守嶋観音の番地が鎮守1、池の番地が鎮守2、K家の番地が鎮守3...

▲ ページトップ

高台移転

町で、目に見える復興計画が出ていないので、今後の事については、まったくわからない。3か所、高台があると、図面は見せてもらったが、まだ全然動いてないので、今後がわからない。すでに、地域から離れている人が多くなっている。町ができると言っても、かえってくる人が半分いるかどうかわからない。仕事も...

写真1 上山神社からみた志津川町



成文化遺産プロジェクト

# Shishimai dance at Iwaki city

- Three types of the deer-style masked persons show the dance to the local Shinto gods on behalf of rich harvest and off-spring prosperity.
- Leading role of the youth-men association and the executive member of the Ujiko – parishioner of the local shrine
- Despite the disaster the local community had done as usual, because they wanted to conduct it as usual.
- The Intangible cultural heritage provides the survivors with local historical-geographical identity, a sense of routine and social integration which certainly existed among them before the disaster and need to exist after

# Summary

- Most of social scientists coincidentally start to engage with the disaster research.
- Researcher needs the relations to government/public authorities to disaster salvation research or activities to Intangible cultural heritage in emergency.
- The way of research activities should be standardized in organization, the way of field survey, and documentation. Many anthropologists tend to be individualist approach but due to the time limit in emergency, the standardization is important.
- The reason of the importance of ICH research in emergency is to enhance the quality of life of the suffered people.
- Culture provides people the integrated sense of routine life which is more than plural functions. In particular, ICH provides a sense of the dense communication way and innovation against the unfamiliar difficulties due to disaster and the related policies.